

国立国語研究所学術情報リポジトリ

[講演2] 他言語を自言語で読むこと：
「訓読」の普遍性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ホイットマン, ジョン メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002652

講演 2 他言語を自言語で読むこと：「訓読」の普遍性について

ジョン・ホイットマン

私は現在、国立国語研究所言語対照研究系という機関に所属していますが、そもそもなぜ日本の国立国語研究所に外国人がいるのか、質問があってもおかしくないと思います。言語対照研究系の仕事は、世界の言語から日本語を見て、日本語から世界の言語を見ることです。そこで、わたしのように、外国人の研究者が所属しているわけです。今日も同じような比較の観点からお話ししますが、訓点というものは、より広く言えば他言語を自言語で読むということです。他言語を自国の言語で読むという習慣、習わしを検討したいと思います。

1 訓読の「普遍性」とは

題目には「訓読の普遍性」とありますが、訓読の普遍性とは一体何なのか、どうして訓読のようなものが普遍的だと言えるのかといった質問が当然あると思います。今日は、私が立てた五つの問いを中心にして説明したいと思います。

一つ目の問いは、漢文訓読は日本だけの習わしか、日本だけの現象、習慣なのかということです。二つ目は「訓読」は東洋だけのものなのか。今までの話でも少し先生方が触れていらっしゃいましたが、日本以外にも訓読と言ってもいいようなものがあつたという結論になります。三つ目はもう少し抽象的な問いです。研究者によっては「表意文字」という言い方もありますが、訓読は表語文字だけから生じるものなのかということです。四つ目の問いは、日本の訓点はどこから来たか。そして最後の問いは、渡辺先生のご発表にもありましたが、なぜ訓読や訓点のようなものを勉強するのかということです。

50 分の話になりますが、なるべくこの五つの問いを中心にして話を進めたいと思います。

2 漢文訓読は日本だけの習わしか

一つ目の問いは、漢文訓読は日本だけの習慣なのかということです。2001 年に訓点語学会の先生方が中心になって『訓点語辞典』を出版されました。その総論の最初のところに、北海道大学の石塚晴通先生が以下のことを書いています (#3)。石塚先生は小助川先生と渡辺先生の先生に当たるので、こちらにいる方々の中には孫弟子となる方もいらっしゃるかもしれません。その 2001 年の文章には「漢文訓読は日本のみで行われたわけではなく、他言語による訓読も行われた。漢字文化圏で漢文を訓読したことは 7 世紀ごろから其の痕跡がある」（石塚晴通「総論」、吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸編『訓点語辞典』2001 年 2 頁）とあります。

その具体例として、7 世紀の中国の歴史書『北史』に、高昌という国に関して記述があります。

「文字亦同華夏、兼用胡書。有毛詩・論語・孝經、置学官弟子相授。雖習讀之、而皆為胡語。」『北史・高昌伝』(643～659)

私なりの訓読で読むと「文字はまた華夏（中国）と同じ、兼ねて胡の言語を用いて書く。毛詩・論語・孝經あり」、という読み下しになります。つまり、高昌の人々は中国と同じ文字を使ったのですが、自らの言語を使って書きました。こうした話が中国の古典があるのです。これにはどういう意味か、後ほど触れますが、次のように解釈できると思います。高昌の人たちは既に7世紀には中国の漢字を持っていて、文字は中国と同じですが、読むのは自国の言語でだったというふうに解釈できるのではないのでしょうか。これが、石塚先生が指摘なさった、「訓読」の早い例です。ここで出てきた高昌は、まさに有名なシルクロードのトルファンというところにあったトルコ民族の国です。この辺は今でもトルコ民族が住んでいますが、当時もそうだったわけです。

注目していただきたいのは、この『北史』の文章で高昌の人たちが読んだものは、すべて漢籍であるという点です。仏籍は一つもありません。それは注目に値する事実だと思います。なぜかという、高昌というところに3世紀か4世紀に既に仏教が入っていたことは間違いないからです。この人々は中国人が仏教を知る以前からその知識があったはずですから、彼らが中国で読んだものはあくまで中国の漢籍だけだといわれています。当時の人たちは多分サンスクリット語で仏典が読めたからです。この高昌が「早期漢文訓読」1つ目の例です。

現在の高昌はこういう様子です（写真1）。



写真1: 現在の高昌 (<http://en.wikipedia.org/wiki/File:Turpan-gaochang-d10.jpg>)

次は韓国・新羅の場合です。これも有名な記述ですが、韓国の8世紀に日本語で薛聰（せつそう）、ソルチョン（설총）という学者がいました。この学者は天才で、今でもお墓が韓国の慶州にあり、見ることができます。本当の墓かどうかは分かりませんが、とにかくあることは確かです。

韓国の歴史書には『三国史記』と『三国遺事』にソルチョンに関する記述があります。一つ目の記述は「以方言讀九經（彼は方言をもって九経を読んだ）」（『三国史記』1146）というものです。この記述も、既に韓国に仏教が入っている時代のもので、読んだものは中国の古典、中国の漢籍です。次の記述も同じようなもので、「以方音通會華夷方俗物名、訓解六經文學（中国語をもってここの方言の音声で読んだ）」（『三国遺事』13世紀）と書かれています。これもやはり漢文訓読の事例となります。

三つ目はベトナムの例ですが、これらの例はすべて『訓点語辞典』において石塚先生により指摘されています。

ベトナムの場合は韓国と違って、13世紀になると独自の文字を作ります。字喃（チュノム）という文字ですが、字喃の「喃」はベトナムの「南」にそこに口へんを加えてたものです。「字喃」はまさにこのような作り方をする文字で、中国の偏やつくりを組み合わせる自国語で読む字です。ベトナムの場合は非常に複雑です。なぜかという、現在のベトナム語でも、一般語彙の80~90%が中国からの借用語だからです。ですから、ベトナム語で読んだといっても、それは高昌の中国語から借用された可能性があるのです。

一つの訓読みの例として、教育に使われた本で『三千字』（Tam Thien Tu）というものがあります。これは3000の漢字を使って詩を作ったものです。よくあるように「天」から始まって「地」「擧」「存」と続きます。

表 1: 『三千字』の例

ベトナム漢字音	中国語	ベトナム語	ベトナム漢字音	中国語	ベトナム語
thiên	(天)	trời	đia	(地)	đát
Cử	(擧)	cát	tôn	(存)	còn

左がベトナム語における漢字音です。thiên は中国語の「天」のベトナム漢字音です。中国語の「地」は đia です。真ん中は全部中国語ですが、ベトナム語では青色の文字（上では太字）のような発音になります。ですから、読むときはまず音で読んで、次に訓で読むという方法を取ります。

これは単なる教育のための習わしとも考えられますが、次の資料（写真2）も同じようなもので、これは19世紀の教育書です。



写真 2: 「嗣德聖製字學解義歌」 (Tự Đức Thánh Chế Tự Học Giải Nghĩa Ca、19 世紀)
http://en.wikipedia.org/wiki/File:Tuduc_thanh_che_tu_hoc_giaiNghia_ca.jpg

最近になってこの資料について日本国内外の学者が訓読という現象に着目しています。この場合は仏典ですが、中国で書かれた原典をいわゆる「喃」で読む習わしがあると云う学者がいます。ですから、漢文訓読という習慣は日本だけではなく、ベトナムを含めたいわゆる漢字文化圏に普遍的な現象だったと言っても過言ではないと思います。

3 「訓読」は東洋だけで行われたか

これらは今言ったようにすべて漢字文化圏、つまり東洋の例ですが、当然次に出てくる問題は、他言語を自言語で読むということは漢字文化圏に限られたものなのかということです。それが 2 番目の問いですが、訓読は東洋だけで行われたのでしょうか。

ここで 1 冊、ご紹介したい本があります。昨年、京都大学文学部の金文京先生がお書きになった『漢文と東アジア—訓読の文化圏』という岩波書店から出た新書です。非常に面

白く、魅力的な本で、私がお話しする内容と随分重なるところがあります。

金先生は仮説として、訓読というものは漢字文化圏、つまり中国の文字を使った国の文化的特徴、歴史的特徴だと主張しています。さらに、訓読がどのようにして漢字文化圏で始まったかということに関して、金先生は仏教が原因となって訓読が広がったとおっしゃっています。元は仏教だということです。つまり、お経を自国語で読まなければならない、読もうとする場合には訓読が生じるという主張です。日本語の訓点史を見ると、それは根拠がありそうな話です。金先生の仮説に興味のある方にはこの本をお薦めしますが、今、述べた金先生の仮説は根本的に間違っていると思います。

なぜかという、ベトナムは別として、韓国の場合でも、初めに訓読らしきことを行った人間は中国の古典を読んだと記録されているためです。高昌の場合も同様で、中国の古典を自国語で読んだとされています。そうすると、仏教による仏典の漢文訓読が存在する以前に、中国の古典を自国語で読む習わしが漢字文化圏にあったということです。このことは既に石塚先生の総論で述べられています。とはいいいながらも、訓読は東洋だけのものなのかという疑問は依然としてあってもいいと思います。

次にするお話は今までとは全く違った観点で、私には専門的な知識がほぼない領域に入ります。文字を借用して訓読みする例が漢字文化圏以外でもよく知られています。その中で恐らく最も注目されているのは楔形文字の場合です。楔形文字とは、粘土に木や象牙の道具を使って押す、訓点でいうところの角筆のようなものです。日本でも非常によく研究されている資料ですが、専門家がお書きになった本を見ますと、例えば筑波大学の池田潤先生は「楔形文字の送り仮名」という論文を『言語』に発表しています。あるいは、東海大学の春田晴郎先生も研究なさっています。彼らにあつて西洋の学者にない意識は、字には音読みと訓読みの両方があるというものです。その意識は西洋の人にはなかなか分かりにくいでしょう。

楔形文字の発展・発達を見ると、起源は紀元前 3000 年ぐらいのシュメール語にあります。それが紀元 2000 年代になるとアッカド語という全く系統の違う言語に借用されました。アッカド人たちが楔形文字を借用したときの読み方は、訓読みと言えます。つまり、その文字の意味をもって自国語の同じ意味の発音で読んだ場合と、ただ音だけを借用して読む日本語の音読みのような場合の両方があったのです。

これが何を意味しているかは、実際にご覧になっていただくのが一番いいと思います。

この人が書く文字は *dingir* というものですが、意味はシュメール語で「神」です。もう一つの読み方は *an* です。その意味も「神」です。その文字が簡略化され、その簡略化されたものがアッカド語に借用されました。中国の文字の発達と少し似ています。

次に書く単語は「蜘蛛」です。その発音は *an zu* で、*an* は音読みです。先ほど見た *an* をアッカド語に借用する際に訓として使ったのです。神という意味です。ここでは更に *zu* という音節を書いたのですが、これで「蜘蛛」となります。第 1 音節を音読みにして、これはシュメール語からの借用ですが、*an zu* となります。

これが音読み、訓読みの東洋圏以外の例となりますが、これは何も私の新しい主張では

なくて、他にもそのように主張する人はいます。

その例としてはこちらの本があります。日本語訳もあるようですが、“Writing systems” (Rogers, Henry. 2005. *Writing systems: A linguistic approach*. Oxford: Blackwell) という文字体系の一般紹介のような本です。この本では先ほどビデオでお見せした楔形文字の概念を説明するのですが、まず第 1 章から第 2 章で日本語の表記体系を紹介しています。日本語という言語には音読みと訓読みがあり、どちらも中国語からの借用文字を使うが別の読み方であると日本語をしっかりと紹介してから、次に楔形文字を紹介します。一般用語としては、先ほど見た an の読み方、つまり起源となる言語の発音で読むことを“on reading” (音読み)、もう一つの読み方を“kun reading” (訓読み) と呼んでいます。これらの研究者は東洋圏以外の場合にも音読みと訓読みがある、中国・東洋圏のはるか以前に同じような習慣が存在したという主張をするのですが、ここで一つの疑問が出てきます。

歴史的事実として、アッカド人たちは何十世紀もの間、シュメール語で書いていました。文字を借用しただけではなく、そのままシュメール語で書いた文献がたくさんあります。ここは特に私の専門ではないので何とも言えませんが、シュメール語で書いた文献をどう読んだのかということが問題です。西洋の専門家は、シュメール語で書いた文献はシュメール語で読み、アッカド語で書いた文献はアッカド語で読んだと説明しています。ここでよく出てくる話は、この人たちは二カ国語話者だった、いわゆるバイリンガルだったということです。

しかし、果たしてそうなのでしょうか。その間にシュメール語の文字で完全にシュメール語の文章として書きながらも、読むときはアッカド語で読んだのではないかと思われる場合がたくさんあります。そのひとつとして、有名な『ギルガメッシュ叙事詩』があります。最初にシュメール語の詩が 5 首あり、残りの本文はアッカド語です。ということは、一つの仮説ですが、音読み、訓読みまでができると、それ以前の段階に訓読のような習慣があったのではないかと、東洋の場合を見ると考えられるわけです。

4 「訓読」は表語文字だけから生じるものか

中近東の楔形文字の例を挙げました。楔形文字は、もちろん途中からそうではなくなるのですが、起源的には表語文字です。つまり一つの単語、一つの語を表すような文字です。そういう文字の場合に訓読が出てくることはおかしくありません。概念と形の関係がしっかりとできていますから、訓読みすることは不自然ではないのですが、訓読は表語文字ではない言語にも生じるのかという疑問があっても思います。そしてその疑問に対する答えは「ある」ということになります。

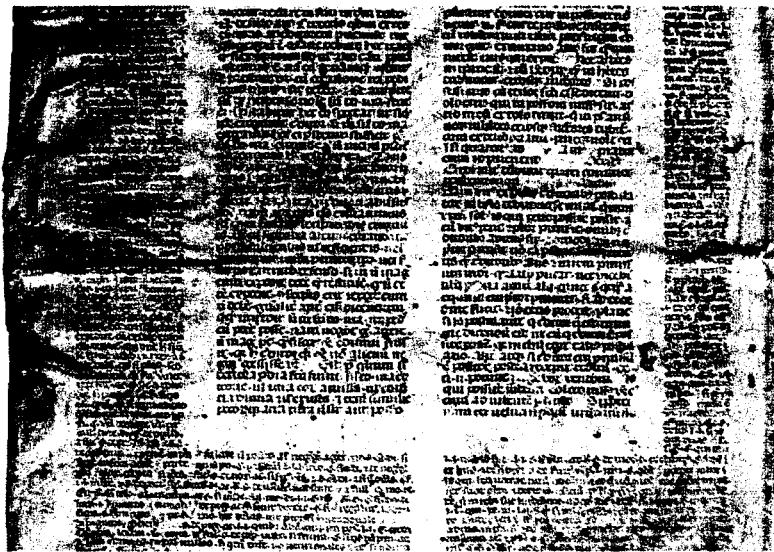


写真 3: Materiali didattici, Università di Modena e Reggio Emilia

(<http://cdm.unimo.it/home/dippiur/tavilla.carmeloelio/materiali%20per%20i%20frequentanti.html>)

次は、中世ヨーロッパにあった「注釈資料」の場合です。これ（写真3）は早稲田大学のアルベリッツィさんがくださった例ですが、イタリア人のアクルシウスが書いた13世紀の法律の注釈書です。真ん中が原典、当時の法律で、その注釈を周りに書いています。注釈の方が長いぐらいですが、周りにきれいに書くのです。これは内容に関する注釈です。漢文訓読とは何の関係もないように見えますが、中世ヨーロッパの注釈資料はこのようなのだけではありません。

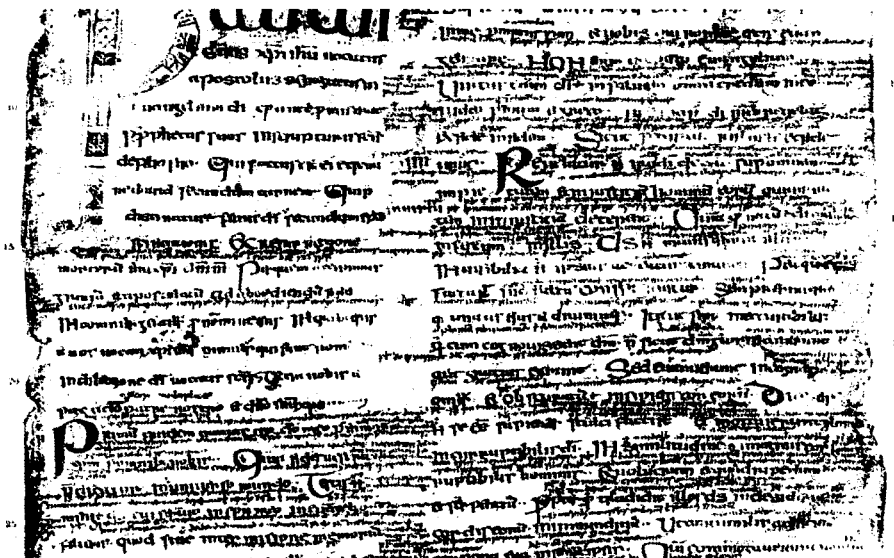


写真 4: ヴェルツブルク注釈

(Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main,

<http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/celtica/wbgl/wbgl01r.jpg>)

写真 4 はドイツにある資料ですが、ヴェルツブルク注釈です。これはキリスト教資料で聖書的一部分です。大きい文字で書かれたものはラテン語、これは聖書のラテン語訳です。小さい文字で行間に書かれたものは古代のアイルランド語です。どういうことかという、8世紀ごろ、アイルランドの僧侶が大陸に行き、修行院で勉強してきました。ラテン語のテキストが初めは読めなかったので、それを読むためにこのような注釈を行間に書いたのです。このヴェルツブルク注釈もそうですが、このような資料は古代アイルランド語の資料としては最も古いものです。

それでも訓読したのか、つまり原典を古代アイルランド語で声を上げて読んだのかどうかは、この注釈を見るだけではまだ分かりません。

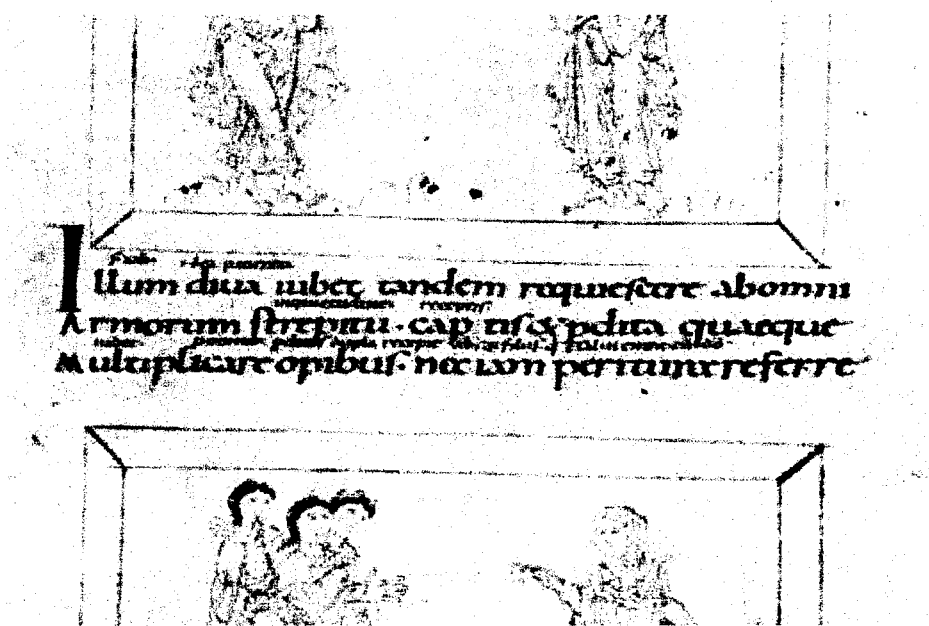


写真 5: 『ブシュコマキア (靈魂の闘い)』大英図書館 MS 24199.

(<http://commons.wikimedia.org/wiki/File:BLAdd24199PrudentiusFol11v.jpg?uselang=fr>)

次に、また少し違った種類の例を見てみましょう (写真 5)。これは大英図書館にある資料で、プルデンティウスという人がラテン語で書いたものです。原典は恐らく 6 世紀頃だと思いますが、これはイギリスで写本されたものです。先ほどの資料と同じように原典が真ん中にあり、その上に小さい文字があるのですが、どちらもラテン語です。つまり、ラテン語にラテン語の注釈を付けたのです。なぜかという、これを書いた人たちはラテン語が母語ではなく、英語を母語とする人間だったからです。

これについての研究が、ウィランドという人が書いた博士論文です。彼は先ほど見たような資料を、かなりたくさん量がありますが、研究して、行間の注釈だけではなく注釈の記号があることを指摘しています (表 2)。

表2: ウィランド (1983) によるラテン語注釈の分類

機能	英語名	日本の訓点との対応
韻律注釈	Prosodic gloss	声点
語彙注釈	Lexical gloss	漢語による語彙注釈
形態注釈	Grammatical gloss	(ヲコト点)
統語注釈	Syntactic gloss	語順点 (返読点、漢数字点など)
解説注釈	Commentary gloss	原典の内容を説明する注釈

注釈を分類してみると、「韻律注釈」は日本語の訓点資料でいうところの声点に対応します。「語彙注釈」は漢語による語彙注釈のようなものです。「形態注釈」はある意味でヲコト点と対応しますが、「この単語は主格ですよ」「この名詞は対格ですよ」「この動詞は未来形ですよ」というような注釈です。「統語注釈」は、この研究者による名称です。語順点、つまり日本語の訓点資料の返り点のようなもの、あるいは漢数字点に相当します。そして、普通の注釈（「解説注釈」）もあります。

具体例を見てみましょう。これはウィランドが扱った資料の一例です。日本の訓点に負けないぐらい非常に複雑です。これは、アラトル (Arator) が6世紀に古典ラテン語で書いた資料で、原典は『使徒の行為について』(*De Actibus Apostolorum*)、つまり12人のキリストの使徒に関する話です。

...
 Quattuor ergo simul repetens ter computat omnem
 VI VII VI VII V

Quam duodenarius circumtulit ordo figuram. (Arator 87 v14f. Arator. *De Actibus Apostolorum*. 原典6世紀。11世紀半ばに加点推定。)

意味は「3と4を掛ければ、従って同時にこの使徒の12くらいの順位を包含する全体図を算出する」ということです。わかりにくい日本語訳ですが、どういうことかという、12人いるということです。四角を描くと、左に3人、上に3人、右に3人、下に3人となることを言っています。

元のラテン語を見ると語順がばらばらです。「4、従って、同じ、掛けて、3、計算する、全部、関係代名詞、12、包含する、順位、図」です。どの言語にしても語順として分かりにくいもので、英語にしても、日本語や現代イタリア語にしても全く意味を成さないほどです。

ここにある記号はどういうものか説明しますと、まず点を使います。上の文には点が1、2と、2がもうひとつ、4、3とあります。下の方ではローマ数字を使っています。この使い方は非常にばらばらです。点を使う場合もあれば、ローマ数字を使う場合もあります。次に点の少ない順で並べ直します。それからローマ数字の少ない順に並べ直すと、この語順

になります。

Computat [ter repetens quattuor] ergo simul omnem
数える 3 かけて 4 従って 同時 全体の
figuram quam circumtulit duodenarius ordo.
図を [関係詞] 包含する 12 の 順位

「3と4をかければしたがって同時に(使徒の)12くらいの順位を包含する全体図を算出する」

この言語は「数える」という動詞から始まって、これがあって、この12の順位が算出されるということになります。

なぜその語順を入れ替えたかという、繰り返しになりますが、これを書いた人たちはラテン語が母語ではない人だったことによります。この語順にすると英語としては分かりやすいので、恐らくラテン語で読みあげたでしょうが、英語らしい語順にして読み上げたようです。今までの資料は注釈資料の一種で、訓点に対応するものも出てきます。他言語の文字を自言語で読むような例ではありませんでしたが、次はそういう例が出てきます。

5 ラテン語原典を古英語で「訓読」する例

70年代にロビンソンが行った研究で、同じような古典ラテン語の資料に古英語の注釈の研究があります (Robinson 1973)。これもまた複雑ですが、これは『哲学の慰め』 (*De consolatione philosophiae*) というボエティウス (Boethius) が書いた資料で、元の語順は古典ラテン語なので英語が母語の日知日は非常に分かりにくいです。

b d c e g a f h
eall manna cynn on eorþum gelicum arist fram upspringe
Omne hominum genus in terris simili surgit ab ortu
全て 人間 類 に 地球 同じ 起きた より 起源

(ケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・カレッジ蔵ボエティウス Boethius 著 『哲学の慰め』 *De consolatione philosophiae* (Robinson 1973: 448))

「すべて、人間、類、に、地球、同じ、起きた、より、起源」と、何とか単語は分かりますが変な語順です。その上に小さい字がありますが、これは古代英語の訳がラテン語の単語に当てて書かれているものです。現代の英語とそう離れてはいません。そして、次にアルファベットの文字を上の方に並べています。

アルファベット順に並べ直すようになります。

<i>a</i>	<i>b</i>	<i>c</i>	<i>d</i>	<i>e</i>	<i>f</i>	<i>g</i>	<i>h</i>
Arist	eall	cynn	manna on eorþum	fram	gelicum	upspringe	
Arose	all	kind of	men	on earth	from	alike	upspringings
起きた	全て	類	人間	に地球	より	同じ	起源

「地球に全ての人類は同じ起源より起き上った」(Robinson 1973: 448)

これは現代英語で読んでもすぐに分かる内容です。つまり「地球のすべての人類は同じ起源より起き上がった」という意味になります。これは明らかに語順を変え、訓のようなものも付けている例です。

ロビンソンが挙げるもう一つの例として、恐らく日本語の訓点資料と最もよく似た例だと思いますが、『ランベス詩篇』(Lambeth Psalter) というものがあります(写真6)。実際の資料を見ることは難しいのですが、このような資料です。これは英国にある一つの詩篇ですが、ご覧のように、ラテン語の文字の上に小さな赤い字でアングロサクソンの古代英語が書かれています。

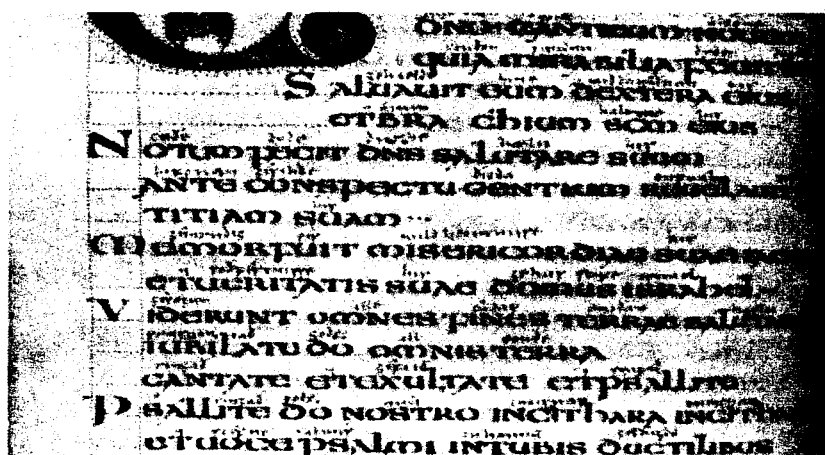


写真6: ウェスパシアヌス詩篇 Vespasian Psalter (推定8世紀)

讚美歌 98 大英図書館 Cotton Vespasian A.I.

(http://looseimages.blogspot.com/2009_09_01_archive.html)

7	-	mildheortnys	þin -	æfterfylge	me
Et		misericordia	tua	subsequetur	me
		
	そして	恵み	君の	追ってくる	我に
on eallum		dagum		{lifes mines}	
Omnibus	・	diebus		vitae	meae

全て(複数与格) 日(複数与格) 命の 我の

これをどう解釈したかという、「私の命の日の限り、君の恵みが、私を追ってくるでしょう」という文章になります。これは日本の『旧約聖書』では詩篇の23篇です。ラテン語では22篇ですが、非常に有名な文章です。これもまた英語の感覚では語順が分かりにくいものです。

記号の説明がレジメにありますが、全部は説明しません。まず、コンマのような点がありますね。その使い方は、二つ目のコンマが下にある単語を、一つ目のコンマがあるものまで持っていくという方法です。これは「従う」という動詞ですが、そこに点がついています。その点が二つあるものを次に持っていくのです。

もっとややこしいのですが、古英語の単語の両脇にハイフンがあります。そのハイフンの機能は、訓点における合符のようなものです。この単語が一つの固まりだということを意味します。

そのような原理で読むと、この語順になります。

And æfterfylge þin mildheortnys me on eallum dagum mines lifes.

And thy mercy will follow me all the days of my life.

「そして私の命の日の限り、君の恵みが、私を追って来るでしょう。」

これが今説明した訓点によって古代英語を訓読した語順ですが、現代英語訳と非常に似ています。日本語で「そして、私の命の日の限り」という有名な詩篇となります。

このようなものは注釈資料の一種に過ぎず、果たしてどれだけ使われたかということが問題です。ロビンソンは70年代の研究において、語彙注釈を一つも伴わずに原文全体に(統語注釈が)付されている例もあると指摘しています。つまり、漢字が分かるのと同じように、ラテン語の語彙はわかっても文全体の意味が分からないために訓点らしきものを付ける資料が古代欧州にあったわけです。

6 「訓読」はどういう文字体系から生じるか

結論から言うと、中世欧州の注釈資料を見ると「訓読」や「訓点」があって、漢字文化圏には限られなかったということになると思います。更に言うと、表語文字、表意文字にも限られないという結果になります。

どうということかという、アメリカ・コロンビア大学にいる学者(Sheldon Pollock, シェルドン・ポロック)は次のような現象の普遍性を指摘しています。例えば、よくある現象ですが、一つの国に外国の文字体系が入ってきます。その次に自国の文字体系が出来上がります。日本語の場合の万葉仮名、韓国の場合の郷歌を書いた郷札(ヒャンチャル、향찰)というものです。中近東の場合はよく分かりませんが、アカッドの場合には音読みのような文字ができました。

ポロックが指摘しているのは、2番目の段階、つまり自国の文字体系が出来上がった段階の後に、場合によってはまた外国の文字が支配的になる現象があるということです。せつ

かく自国言語を表記する文字体系ができたのに、なぜ再び古典的、国際的な外国の文字が定着するのか。ポロックは不思議に思い、特にインド南アジアの事例に着眼しました。この現象の理由は、「古典的」な文字体系を自国語で読んだことによると思います。つまり、自分の国の文字を捨てて、自分の言語を読む習慣をやめたのではなく、自分の言語を権威ある外国の文字体系で読んだために、このような現象があるのだと言えます。

7 日本語の「訓点」はどこから来たのか

四つ目の問いになりますが、日本語の「訓点」はどこから来たのでしょうか。一つの考えとしては、この10年間に流行りだした考えで、先ほどご紹介した金文京先生もおっしゃっていますが、朝鮮半島から入ってきたということです。

その考えはどこから来たか。これはあまり品の良くない話ですが、ネットで検索すると次の話が見つかります。

カナ文字は朝鮮半島でも使われてた？ 2000/11/23 22:22

1: NHK のニュース10でやりました。

2: どういう内容だったか詳しく説明してください。

3(=1): 朝鮮の11世紀の高麗のお経にカナ文字らしきひっかき傷があつてそれがカナ文字の起源？だとか何とか。番組内では、800-900年頃に日本でカナ文字の原型らしきものが既にあった、とも言っていました。普通に考えたら日本から伝わった、と考えるのが自然な気がするのですが…

4: なんでそうやってすぐ日本の文化は朝鮮半島が
関与しているとしたがるんだろうね。圧力？

5(=1): 広島大学名誉教授の小林よしのり（漫画家とは別人）らによってカナ文字のルーツが朝鮮半島の可能性を示す資料が発見される

6: ショック！かな文字は韓国から来ていた！？
マジかよ…俺の日本人としてのプライドが…

これは12年前の話ですが、ネットで話題になっていました。「仮名文字は朝鮮半島で使われたという話を、NHKのニュース10でやっていました。説明してください」という問いの説明が3です。これをご覧になった方、あるいはこのような話を耳になさった方もいらっしゃるかと思います。

その続きとして、4が「何でそうやってすぐに日本の文化は朝鮮半島が関与しているとし

たがるのか。圧力？」と、少し意地悪なことを書くのです。そして 5 に、先ほど渡辺先生の話に出た広島大学の小林芳規先生が出てきます。小林先生はどういうことをなさったかというと、訓点の研究者はよく知っていると思いますが、ちょうど 2000 年に韓国に行って韓国の角筆資料を調べた際、日本ではあまり注目されていない資料と角筆の点が似ていることに気が付きました。それが『華嚴経』という本です。韓国では、もしかすると 10 世紀までさかのぼる一番古い訓点、口訣資料となるわけです。

先ほどから角筆の話が出ていましたが、角筆は具体的に見るとこういう形をしています(写真 7)。道具で点を付ける、つまり穴を開けます。



写真 7

日本にも『華嚴文義要決』あるいは『華嚴文義要決問答』という資料がありますが、小林先生はそこで使われるヲコト点、点図の大系が先ほどご紹介した韓国の資料と一致していることに着眼しました。

これには背景があるのですが、『華嚴経』に関しては、朝鮮半島の新羅がかかわったことは歴史的な事実として明らかになっています。例えば奈良時代の 739 年の審祥の出来事などです。審祥はいわゆる新羅学生で、恐らく日本人だったのですが新羅で勉強していました。

これは説明が音声で表しているので分かりにくいですが、先ほどご紹介した韓国の華嚴経の点図がこうだとすると(図 1)、日本の『華嚴文義要決』は似たような並べ方になります(図 2)。そしてこのような並べ方は、日本のほかの資料にはないという結論に至ってい

ます。2002年の段階では、小林先生は日本の片仮名が朝鮮半島から借用されたとはおっしゃってはおらず、訓点の仕方、特にヲコト点がよく似ているという程度の発言しかなさっていません。

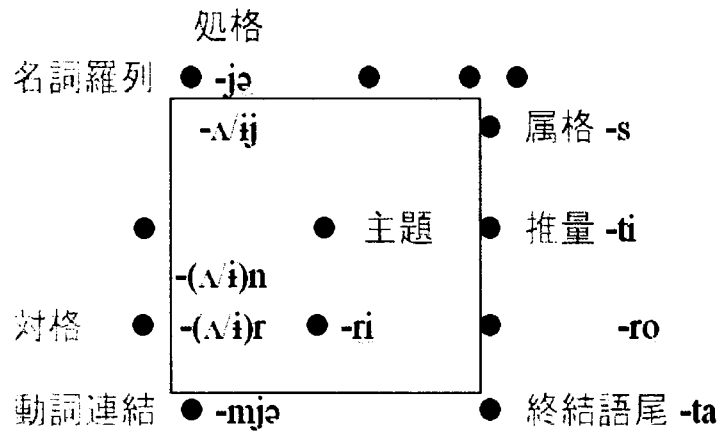


図1: 周本華嚴經卷36の角筆吐点 (朴 2007:70)

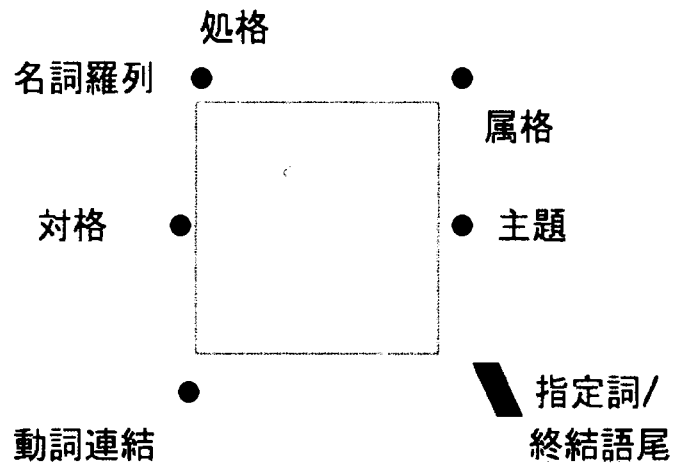


図2: 佐藤本『華嚴文義要決』の吐点/ヲコト点 (小林 2002、金 2002 に拠る)



NB I.074-075:

説十法地門一品／六卷(166)

韓国語：一品六卷-ta

日本語：一品六巻なり

写真 8

これ（写真 8）は日本の資料ですが、『華嚴文義要決』をどう解釈するかという問題があります。韓国では多くの学者が、この資料は韓国語のものだと考えています。元の著者は新羅の人ですし、もしかすると韓国で作られたヲコト点が日本へ持ってこられて、ただ写されただけの可能性もあるという考えです。でも、よく見ると、韓国の口訣資料と一致しないところもあります。

例えば、この語尾は日本風に読むと「ナリ」となりますが、韓国風に読むと動詞の終止形です。名詞の次には来るのはおかしいことになります。そうすると、もしかするとこの資料にヲコト点を付けた人は、新羅の当時のヲコト点のシステムを知りながらも日本語で読むために付けたという可能性があります。あるいは、両方の言語で読むために付けた可能性もあるわけです。

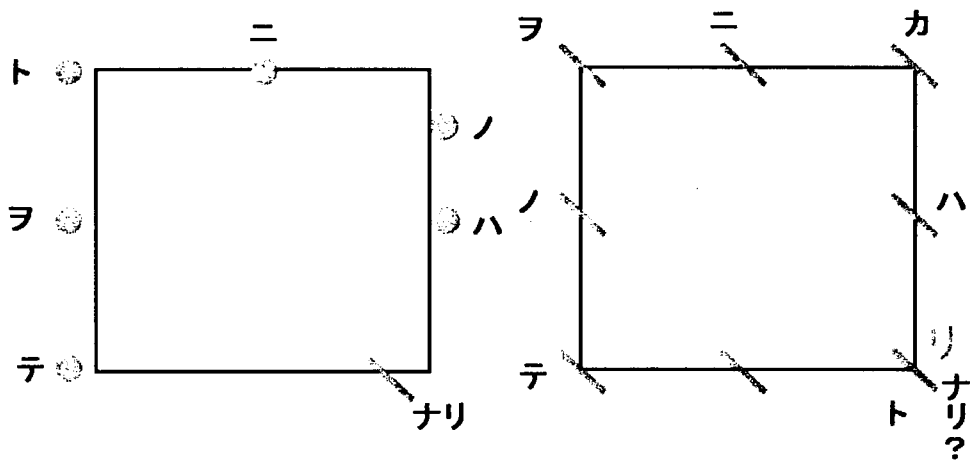


図3: 「佐藤本華嚴文義要」のワコト点(左)と春日(1956)、築島(1996)による羅摩伽經のワコト点(右)

問題はこの点図(図3)です。このワコト点の並べ方は日本のほかの資料にはありません。これは春日政治先生と築島先生の本で紹介されている『羅摩伽經』という今は見ることのできない資料ですが、この点の並べ方は、先ほどご紹介した佐藤本『華嚴文義要決』とほとんど同じです。

では、片仮名までも新羅、朝鮮半島から入ったのでしょうか。この中でご存じの方もおられるかと思いますが、韓国の場合、片仮名に対応するものは口訣文字です。口訣文字には日本の片仮名と非常によく似ているものがあります(表3)。

表3: 口訣文字

去 キ	在 ナ	古 コ	果 人 ノ	ホ ホ	這 道	只 ハ	乃 乃	奴 ヌ	臥 ト	飛 モ	噫 イ	
多 ト	丁 丁	刀 刀	知 矢 ノ	入 の	冬 冬	矣 ム	羅 ロ	以 ...	令 令	利 リ	尸 尸	
乙 シ	竹 竹	弥 ミ	毛 モ	音 音/立	邑 邑	火 火	沙 シ	示 シ	叱 シ	良 リ	亦 イ	
良 リ	乎 フ	于 子	衣 イ	是 シ	代 代	齊 シ	下 下	乎 フ	乎 フ	兮 フ	為 シ	中 中

「リ」と似ていたり、「ノ」と似ているなど、結構あります。

ただし、読みを見ると一致するものは著しく少ないです。例えば、この場合（「利」）には省略の仕方はこうなるのですが、読みは「イ」です。これは日本語の「オ」と似ていますが読み方は全然違います。

漢字の略体化は、中国も含め、漢字文化圏では既に 8 世紀までに普遍的なことになっていました。韓国では、日本の万葉仮名のように表語文字として使ったものを簡略化して口訣文字ができました。日本は並行して、日本語を表すために表語文字として使った万葉仮名を同じように簡略化しました。簡略のアイデアを誰が最初に思いついたのかはわかりませんが、口訣文字が日本の片仮名として直接借用されたということはやはり言い難いと思います。

結論といっても、これはまだ研究が途中ですが、ヲコト点の場合は借用といいですか、このような直接の影響があった可能性はあると思います。片仮名の場合は少し難しいと言わなければならないと思います。ということは、先ほどのネットの会話の方々は、そう心配する必要はないということです。

8 なぜ「訓読」や「訓点」のようなものを勉強するのか

最後の問いは、なぜ「訓読」や「訓点」のようなものを勉強するのかということです。これには渡辺先生のお答えもありますが、ここでは私としての答えを述べます。

二つの目的があると思います。一つは古代の言語を知るためです。日本における訓点語研究にはこのような目的が多いと思います。例えば、日本語は 9 世紀になると『万葉集』を勉強するので、8 世紀の資料はたくさんあります。それから、平安時代に入ると 10 世紀の資料が少しありますし、11 世紀の資料となるとたくさんあります。しかし、仮名による 9 世紀の資料はほとんどありません。どうやって 9 世紀の言語を知るかというと、訓点資料を使うしかないのです。

韓国の口訣研究に関しても同じことが言えますが、日本の訓点をなぜ研究するかというと、古代の言語を知るためです。これは古代言語の資料です。中近東の楔形文字の研究に関しても、同じ目的で研究する人がたくさんいます。それが目的の一つです。私の場合、8 世紀の奈良時代の日本語に興味があり、9 世紀の資料が少ないことに気が付き、訓点を通してそれを研究するために勉強を始めたということがあります。他言語も全く同じです。

もう一つの目的は、これは渡辺先生もご説明なさったものです。それは、古代の言語生活を知るためです。具体的に言うと、今日の話で出てきたのは、何語で文字を書いて読んだのかを知るためです。他言語の文字をもって書いて、自国語で読むという方法は最近までは珍しい、あまりされないことです。古代にはされたのですが、現代はされないと考えられてきました。しかし、以前の研究者が考えたよりもかなり普遍的ではないかというのが私の考えです。

発表は以上です。ありがとうございました。